出土箇所	出土層位	出土品実測図番号
第1トレンチ	Ⅰ層	20・22・24・27・28・30
	Ⅲa層	15
第2トレンチ	Ⅲa層	41
	不明	16
第4トレンチ	Ⅲa層	29
	Ⅳc層	18・19
	Ⅳd層	12
第5トレンチ	Ⅳb層	7・8
	Ⅳ層	11
	Ⅳc層	31・37・38
	Ⅴ層	46・47
	不明	25
第6トレンチ	Ⅰ層	10・21・26
	Ⅱ層	23
	Ⅲb層	1～6・13
	Ⅳc層	32・33
	不明	14・35
第7トレンチ	Ⅲa層	9
	Ⅲb層(瓦列)	34・42
第8トレンチ	Ⅲa層	17・39
	Ⅲb層(瓦列)	36・40・43～45

成菩提院陵駐車場出土品実測図一覧

二・一～二・七センチを測る。

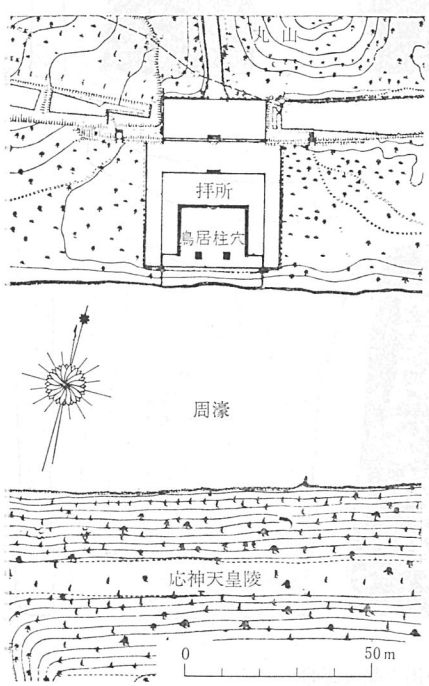
調査は以上のような成果を得て終了したが、工事の性格が盛土工事という遺構・遺物に直接影響を与えるものではなかったため、工事は予定通り施工した。

註　中野政樹編「燈火器」『日本の美術』第一七七号　昭和56年（至文堂）33頁

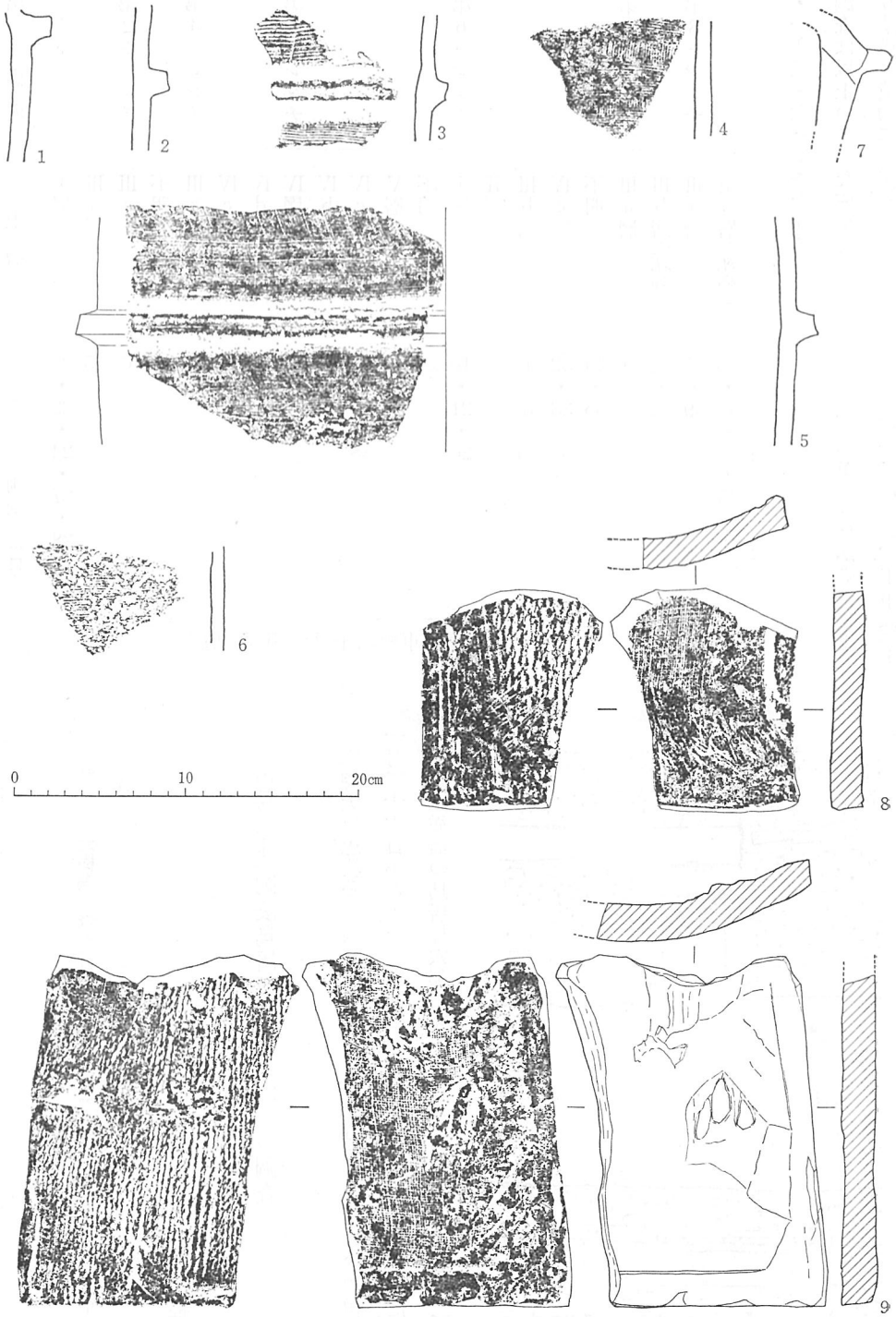
（福尾正彦）

恵我藻伏岡陵鳥居改修工事箇所の調査

応神天皇恵我藻伏岡陵の鳥居を改修することになり、昭和五十五年十一月二十六日から十二月二日にわたって立会調査を実施した（第23図）。掘削は従前の鳥居柱穴部二箇所（二メートル四方、深さ二メートル）



第23図　恵我藻伏岡陵調査箇所位置
(1/2,000)

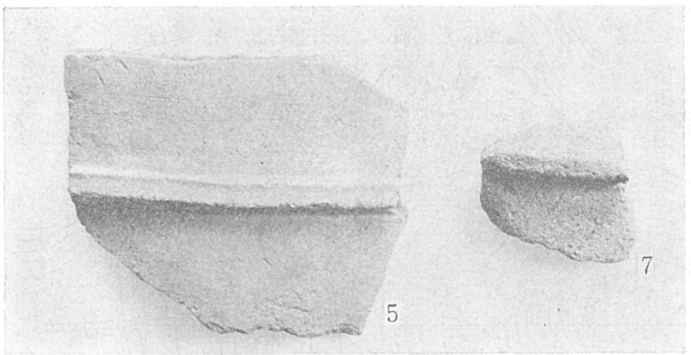


第24図　恵我藻伏岡陵の出土品（1/4）

を手掘りで行なった。土相は、砂利を多く含んだ茶色ないし褐色の土層で、埴輪片、古瓦片を包含する後世の盛土である。遺構は検出されなかったので予定通り施工した。

遺物は、埴輪七片と瓦三片が盛土の各部分から出土している。

埴輪円筒（第24図1～6・第25図）　胴部片ばかりである。径の復元できたものは、約四〇センチと大きい。突帯はいずれも断面が台形を呈し突出度には個体差があるが、どれもしっかりしたつくりである。



第25図　恵我藻伏岡陵の出土品

外面の調整は横刷毛目を基調とするが、部分的には縦刷毛目を残すものもある。横刷毛目はいわゆるB種と呼ばれる断続的なもので、幅約五センチを一単位としたことが、条痕から窺える。また内面にも斜の刷毛目を施したものがある。

色調は、黄褐色ないし赤褐色である。なお5の胎土中には金雲母が含まれている。

朝顔形埴輪（第24図7・第25図）　胴部から花芯部に向かう肩部の破片である。器壁は他の埴輪円筒に比して厚いが、最も重みの加わる部位であるため、他の部分は薄くなる可能性も考えられる。突帯の底面には丹を塗布した痕跡を残す。当初は外面全体に丹彩したものであろう。

瓦（第24図8・9）　凹面に布目、凸面に縄目の圧痕ある平瓦である。9は周縁に一～二センチ幅の浅い面取りを有する。また凹面の一部には布目上に粘土が貼り付き、これを削り取った痕跡が認められる。

色調は、8が灰黄白色、9が暗赤褐色を呈し、焼成は共にあまい。

（土生田純之）

大吉備津彦命墓整備工事箇所の立会調査

大吉備津彦命墓の整備工事に際し、昭和五十五年十二月四・五の両日に立会調査を実施した。調査にあたっては、岡山県教育庁文化課文化財二係長河本清・同文化財保護主事平井勝の両氏にご協力をいただいた。

当墓は岡山市の中心部から西方へ約五キロの吉備中山南側の尾根上に位置する。丘尾を切断して造られた南面する前方後円墳で、別名「茶臼山」あるいは「臼の御陵」と呼ばれている。その両側面には、緩傾斜ないし平坦な面があって、当墳の基底面となっているので、図の破線のように墳麓を想定することができる。工事箇所は、墳丘から離れているが、念のため工事に立ち会った。